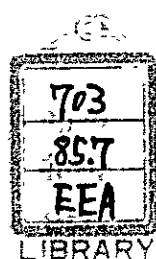


ブラジル，サンパウロ近郊における
花卉栽培の現状と見通しに関する
調査報告書

昭和 54 年 8 月

国際協力事業団



移農牧
J R
79-6

国際協力事業団

納入 日 '84 4.-3	703
	85.7
記録No. 02374	EEA

は し が き

ブラジルにおける花卉栽培は近年、日系移住者の営農形態として確固たる地位を占めつつあるが、その歴史は非常に浅いため、国全体としての統計は未だ不明の現状である。

本冊子は当事業団サンパウロ支部において1979年3月に「サンパウロ近郊における花卉栽培の現状と問題点、見通しに関する調査」と題して実施した調査をまとめたものである。この調査はブラジルでも花卉栽培の先進地である、サンパウロを中心に行なわれたもので、花卉生産の動向と市場の見通しについてもふれているので、日系移住者をはじめ、関係各位の参考資料として活用戴ければ幸いである。

昭和54年8月

移住海外事業部長

JICA LIBRARY



1025698[0]

目 次

1. 生産状況	1
イ) パ ラ	2
ロ) グラジオラス	3
ハ) 菊	5
ニ) カーネーション	6
2. 販売状況	9
a) 流通経路	9
b) CEAGESPでの取引状況	11
c) 主要切花の動向	13
イ) パ ラ	13
ロ) グラジオラス	16
ハ) 菊	19
ニ) カーネーション	24
3 輸 出	26
イ) ドライ・フラワー	27
ロ) パ ラ	29
ハ) その他の花	31
ニ) 観葉植物	32
4 問題点と今後の見通	34

統計表，グラフ

表 1	サンパウロ州内におけるバラの栽培状況	2
" 2	1978年におけるバラのCEAGESP入荷量(生産地別)	3
" 3	オランブラにおけるグラジオラスの生産状況	4
" 4	1978年グラジオラスのCEAGESP入荷状況(生産地別)	4
" 5	1978年ボンボン菊の	5
" 6	日本菊の出荷地区	6
" 7	1978年カーネーションのCEAGESP入荷状況(生産地別)	6
" 8	主要切花のCEAGESPにおける取扱高	11
" 9	観葉植物	11
" 10	CEAGESPの取扱数量	12
" 11	バラのCEAGESPへの入荷量と価格の推移	13
" 12	バラの月別入荷量	14
" 13	バラの月別価格	14
" 14	バラの入荷量と価格の関係1976,1977,1978(グラフ)	15
" 15	グラジオラスのCEAGESP入荷量と平均価格の推移	16
" 16	グラジオラスの月別入荷量	17
" 17	グラジオラスの月別価格	17
" 18	グラジオラスの入荷量と価格1976,1977,1978(グラフ)	18
" 19	菊のCEAGESP入荷量と平均単価の推移	19
" 20	ボンボン菊の月別入荷量	20
" 21	ボンボン菊の平均価格	20
" 22	ボンボン菊の入荷量と価格1976,1977,1978(グラフ)	21
" 23	日本菊の月別入荷量	22
" 24	日本菊の月別価格	22
" 24	日本菊の入荷量と価格1976,1977,1978(グラフ)	23
" 25	カーネーションのCEAGESP入荷量と平均価格の推移	24
" 26	カーネーションの月別入荷量	24
" 27	カーネーションの月別価格	25
" 28	カーネーションの入荷量と価格1978年(グラフ)	25
" 29	ブラジルの花の輸出実績	26
" 30	輸出平均単価	27
" 31	バラ積ドライ・フラワーの輸出実績	27
" 32	飾つけ	28
" 33	バラの輸出実績	30
" 34	その他の花の輸出実績	31
" 35	観葉植物の輸出実績	32

1 生産状況

ブラジルにおける花卉栽培の歴史は非常に浅く、専門化や企業的栽培、海外への輸出等が始められたのはようやく1960年代の中頃を過ぎてからである。ブラジルの花卉栽培は、もともとヨーロッパ移民のポルトガル系、ドイツ系、イタリー系などによって導入され、草花程度のものが副業的行なわれていたが、第2次大戦を境とした工業化にともなう都市の発達から生活様式が従来と大きく変化した頃を境として、花への関心が一般市民のなかに高まり、これに呼応した生産の拡大が行なわれてきた。生産者も従来のポルトガル系等に代って日系とオランダ系が抬頭し、優良品種の導入や、栽培技術の改良に貢献し、生産分野に重要な地位を占めて現在にいたっている。

とくに日系では1955年松岡女史によるカーネーション新品種の導入、石橋氏によるオランダ産グラジオラスの導入と陣内氏による栽培技術の開発、バラでは大平氏による栽培技術の開発や、戦後のコチア青年である山口氏の企業的栽培、海外輸出などの功績があげられる。また日系とともに花卉栽培面で大きな地位を占めているオランダ系移住地のオランブラでは、DEWIT, BAKKER及びSCHOENMAKERの3家族による、オランダ本国よりのグラジオラス球根の導入普及などが記録されており、これらの先駆者によって現在の花卉栽培の基礎が形成され、今日の発展をみるにいたったものである。

また、全般的に花卉栽培の発展を促がした要素の1つには、自立営農に入る場合、他の農業に比して比較的小資本で始められること、営農収支が蔬菜等に比して有利であるということなどもあげられており、さらに日系の多い部門では景気がいいという情報があると、これまでの蔬菜やパタタ作りを止めて転向した傾向があり、一時的に一挙に栽培が増加するといった経緯もあった。しかしながら花の栽培は他の農作物と異り、花に対する趣味をもつものでなければ長続きしないといわれるとおり単に営利だけを目的とした花作りはやがて姿を消し、スザノ近郊の石橋氏によると、現在ではいわゆる本当に花の好きな花作りだけが残っているとのことである。

ブラジルにおける花卉栽培が長らく二次的な農業の地位にあったことから、国又は州としての統計は皆無の状態、2年程前によくサンパウロ農務局が調査の必要性を認めて予備調査を行った程度で、現時点にいたるも栽培農家数や栽培面積に関する数字は不明である。本調査ではCEAGESP(サンパウロ中央卸売市場)や業界誌、専門家の意見等を総合してサンパウ

ロ州内での栽培状況を報告するものである。

イ) バ ラ

ブラジルにおけるバラの栽培は、1950年頃から始められたといわれているが、本格的に普及され始めたのは1960年頃からで、1965年頃よりは日系農家による栽培も増加し始め、バラの市場性を確立したのは日系農家であるといわれている。現在では企業の経営を含み日系が圧倒的に多い。

サンパウロ州農務局が行った調査によると、州内におけるバラの栽培面積は844 haで、その大部分がサンパウロ周辺地域に集っており、1975年で州全体の生産の873%を占めている。

表1 サンパウロ州内におけるバラの栽培状況

区 分	1968年	1975年
栽 培 面 積	240 ha	844 ha
生 産 量	200 万本	700 万本

出所：1968年度－農業と協同誌1972年4月号

1975年度－DIRIGENTE RURAL 1978年5/6月号

サンパウロ市近郊の栽培地としては、スザノ、グアラレーマ、イタクゥセソーバ、アチパイア等が有名である。CEAGESP への出荷量からみるとアチパイアが圧倒的に多い。これはアチパイアが生産物の60%をCEAGESP に出荷するためといわれており、他の地区にみられない高い出荷率を持っているためである。他の地区の場合データがなく不明であるが、農務局経済研究所では、CEAGESP への出荷量は平均して全生産量の25%程度とみている。1978年度のCEAGESP への出荷量は次の状況であった。

表2 1978年におけるバラのCEAGESP入荷量

生産地	入荷量 1,000ダース
アチバイア	26076
グアラレーア	1669
コチア	1088
モン・ダス、クルーセス	1048
その他地域	8339
計	38220

出所：CEAGESP

サンパウロ農務局が推定しているCEAGESPへの出荷量＝総取引量の25%を基準として計算すると、サンパウロ周辺地域の総取引量は1,529万ダースとなる。以上のサンパウロ周辺地域のほか州内の生産地としては南聖海岸、北聖海岸、バーレド・バライーバ、ソロカーバ、カンピーナス、リベイロン・プレット、パウルー、サン・ジョゼ・ド・リオ・プレット、アラサソバ、プレシデンテ・ブルデンテ等があげられる。

サンパウロ周辺でもっとも多く栽培されている品種としては、HAPINESS, SUPER-STAR, (以上赤色), GOLDEN, SPECTRE及びBUCCANEER(バラ色), CARLA SONIA, CARINA(オレンジ色), DIAMONDO, JUBILEE(黄色がかったオレンジ), RUMBA, SAMBA(黄及赤)等である。

ロ) グラジオラス

バラ以外の花については農務局の調査が行われていないため、栽培面積及び生産量を知ることとは困難である。とくにグラジオラスの場合は、周年栽培で1年を通じて出荷出来るように植付けられており、時期により栽培面積も異ってくるので生産量を推定するのもむづかしいといわれている。

州内の栽培地域は、主要産地であるジャグアリウナの他アチバイア、スザノ、モン・ダス・クルーセス、ジャカレー、サン・ジョゼ・ドス・カンポス、タウバテ等であるが、なかでもジャグアリウナを中心とするオランブラは、本国のオランダより取寄せた球根をもとにしたグラジオラスの集団栽培地として異彩をはなっており、州内生産高の50%～70%を占めているといわれる。

このオランブラは、1947年オランダ人の移住者によって開設されて以来、カフェー雑作を

行ったのち、1955年より栽培を始め、1958年に本国より取寄せた球根を繁殖させ、今日のグラジオラス栽培の基盤を作った。現在では国内販売を押える一方、本国のオランダを始めとするヨーロッパ諸国への輸出も続けている。

表3 オランダにおけるグラジオラスの生産状況

年 度	1960	1965	1970	1978
日産量	100 ^{ダース}	1,000	4~5,000	20,000

出所：DIRIGENTE RURAL 1978年5/6月号

栽培面積は500ヘクタールを5年周期で栽培しており、用地として2,500ヘクタールがこれにあてられている。栽培地区は当初ジャグアリウーナで開始されて以来、栽培面積の拡大から奥地に進み、現在では、アグアイ、カーザ・ブランカ、バルゼングランデが中心となっている。

なお、オランダ入植者150家族のうち花卉栽培を行っているものは30家族で、グラジオラスのほか日産次のものを生産している。バラ5,000打、菊1,000束、カーネーション200束、百合200打、サボテン5,000ヶ、観葉植物5,000打。出荷物は50%がサンパウロ及びリオ市場、サンパウロ奥地方30%、残り20%がブラジリヤ、ゴイアニア、サルバドール、クリチーバ、ペロ・オリゾンテの各地に出荷されている。

1978年度のCEAGESPへの入荷量は次の通りであった。

表4 1978年グラジオラスのCEAGESP入荷状況

出 荷 地 域	入 荷 量 1,000ダース
ジャグアリウーナ	512.7
ピラルド・ソール	149.1
サン・パウロ	139.0
ジュンジャイ	135.8
カンピーナス	112.9
タウバテ	91.0
その他の地区	291.0
計	1,431.5

出所：CEAGESP.

ハ) 菊

ボンボン菊及び日本菊は、日系農家によって導入されていらい、1971年までは日系農家の独占栽培であったが、最近では菊の市場性が高まってきたため、オランブラを始めとし日系以外の栽培も盛んとなってきた。菊が市場に出始めた頃はとくにヨーロッパ系の移住者が、墓用の花として一般家庭に飾るのを嫌っていたため、市場の成り行きがあやふまされていたが、菊のよさが認識されたことや、切花に代る鉢物への趣好が高まってきたこともあって、70年代に入ってから急速な成長をみせ、77年にはグラジオラスをしのぐまでに普及しており、鉢物を主体とする日本菊の需要も又着実な伸びを示している。鉢物とされるのはマカロン種(黄及白)、インジノポリス種(黄、白及びブロンズ)、切花用としてはスプレイ種(WHITE MABEL, YAGAU, YELLOW BONNTE JEAN, YELLOW TUNEFUL, BLUE MABEL)等がある。

栽培地域はボンボン菊の場合コチア、アルジャー、イビウーナ、ジャカレー等が多く、日本菊ではアチバイア、モジ・ダス・クルーゼス、サンロツケ、アルジャー地区が代表的な産地である。

1978年度にCEAGESPに入荷した菊の出荷地は次の通りであった。

表5 1978年ボンボン菊のCEAGESP入荷状況

出荷地域	入荷量 1,000束
コチア	197.1
アルジャー	108.1
アチバイヤ	92.3
エンブ	59.8
グアルーリヨス	57.2
モジ・ダス・クルーゼス	54.5
サン・パウロ	40.3
イビウーナ	39.3
タツイ	35.7
その他の地区	206.9
計	891.2

出所：CEAGESP

表6 日本菊の出荷地区(1978年 CEAGESP)

出荷地域	入荷量 1,000ダース
スザノ	6.1
モジ・ダス・クルーゼス	4.5
サルト	4.4
アチバイア	2.2
その他の地区	4.4
計	21.6

出所：CEAGESP.

二) カーネーション

カーネーションは古くよりヨーロッパ移民と共に導入されて以来、フランスでの栽培歴の古い花であるが、1955年に松岡女史によるウルクアイよりの大輪シム系カーネーションの導入以来、日系農家の間に改良種が普及され、以後在来種の商品価値が次第に失われていくと共に栽培も日系が占めるようになった。

主要生産地は、アチバイア、コチア、サン・ベルナルド・ド・カンボ、モジ・ダス・クルーゼス、及びスザノがあげられている。

1978年度のCEAGESP 入荷量からみた出荷地域は次のとおりである。

表7 1978年度カーネーションのCEAGESP 入荷状況

出荷地区	入荷量 1,000ダース
アチバイア	212.3
サン・ベルナルド・ド・カンボ	54.2
イビウーナ	45.5
グアルーリヨス	31.8
その他の地区	100.5
計	444.3

出所：CEAGESP.

注) 菊の場合はバラの場合よりもCEAGESP の利用度が高く、電照ギクの企業的栽培を行っているコチアの山田農場の場合出荷物の70%はCEAGESP 経由である。

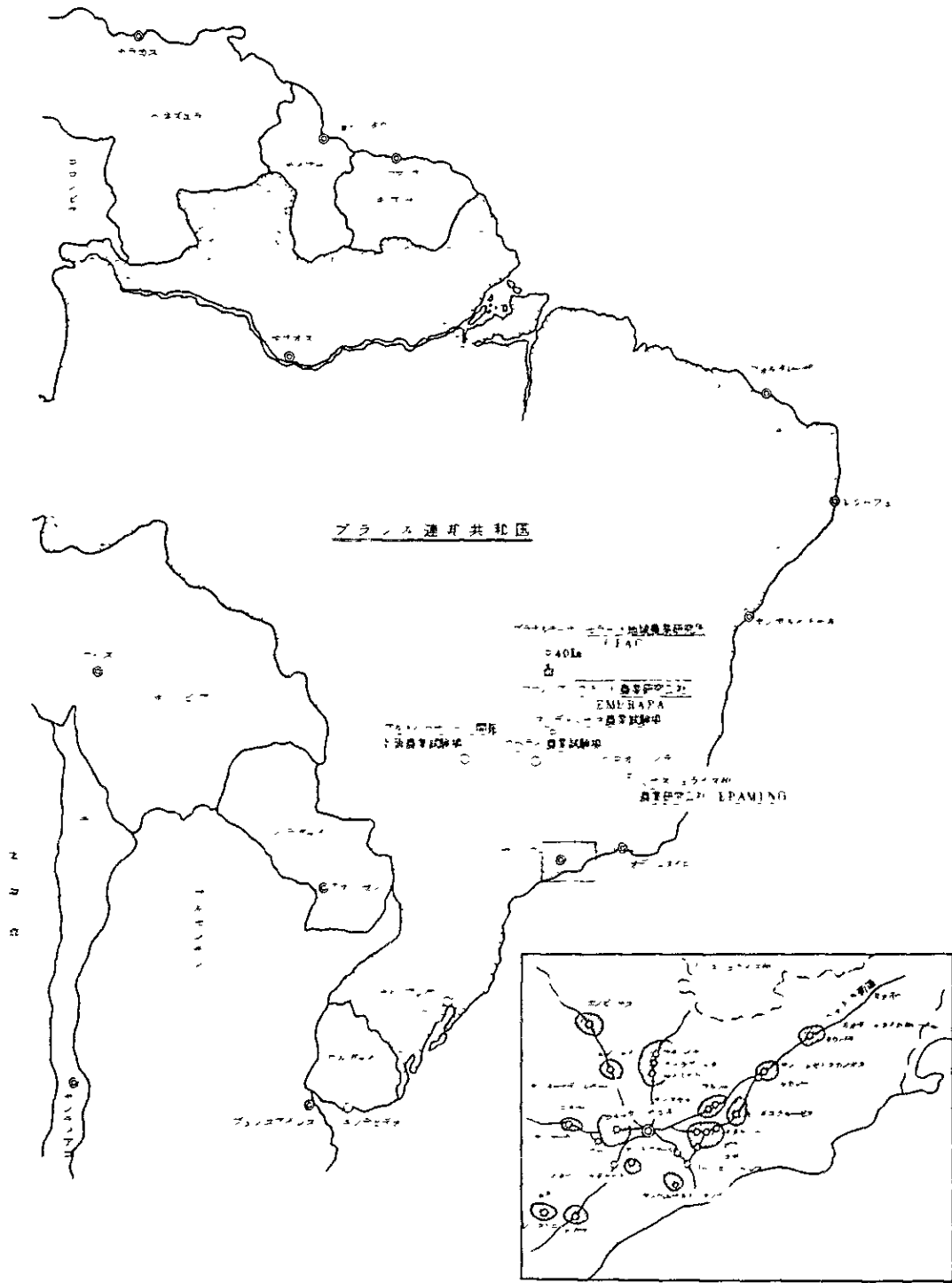
栽培農家に関する統計も皆無であるが、業界に精通している石橋初男氏によると、CEAGESP への出荷トラックが小型車を含め平均 600 台あるところからみても、1 台に 3 家族分が積込まれると仮定すると、出荷農家数は 1,800 戸～2,000 戸程度ではないかとの推定であった。

また日系農家の分布については、花卉協会が 1973 年度に行った調査によると下図のような分布である。(この調査が最終的なもので以後行なわれていない)

サンパウロ近郊日系花卉栽培分布 1973 年

(花卉協会 20 周年記念誌より)

地 区	家族数	地 区	家族数
アチバイヤ, テーラ・プレッタ, マインボラン	148	サンパウロ市	30
バルゼン・グランデ, コチア	122	ジユキア, レノストロ, ビグア	25
イタケーラ, ポア, スザノ	97	マウア, リベイロンピーレス, オーロ・フィーノ	20
ポンスセノソ, アルジヤ	95	エンブー, カレウーバ, ジュベーバ	16
ジヤカレイ, サンジョゼ・ドス・カンボス	69	サント・アマーロ	10
モジ・ダス・クルーゼス, グアラレマ	67	サン・ベルナルド・ド・カンボ, ジアデマ	10
ジュンジャイ, カンピーナス	40	ジャグアレー, タボン・ダ・セーラ	7
イタベセリカ・ダ・セーラ	30	ジャラグアレー, サンターナ・ダ・バルチーバ	5
タウバテ	30	サンロノケ, ソロカーバ, マイソンケ	4
		計	825



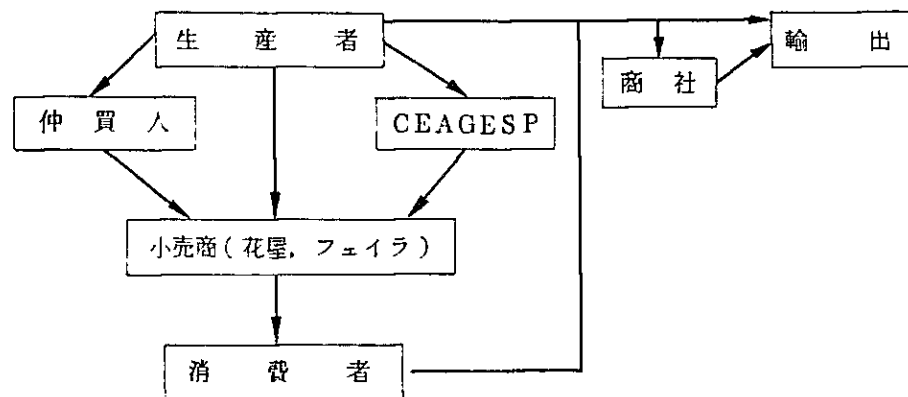
2. 販売状況

a. 流通経路

一般の農産物の場合、大部分が中央卸売市場において取引されているのと異なり、花の流通経路はサンパウロ州の場合、次の形態によっている。

- 1) CEAGESP（サンパウロ中央卸売市場）に出荷し販売する方法
- 2) 農家が直接小売商（花屋、フェイラ）又は消費者に販売する方法
- 3) 農園の庭先渡して仲買人に売渡し、仲買商人が花屋その他に卸す方法
- 4) 海外への輸出

花の流通経路



以上の流通経路のなかでもっとも多く利用されているのは(2)、及び(3)の場合で一部が(1)の CEAGESP を経由する方法であり、さらに少量が海外輸出に向けられている。花の生産消費に関する統計が困難なのは、公式に記録されていない(2)及び(3)の場合が大きな割合を占めているからに他ならない。

(1)の CEAGESP を経由する方法では、每周火曜日と金曜日の2日、午前11時から14時までの間に生産者と小売業者が集り取引が行なわれる。このもっとも効率的と思われる中央市場での取引方法が少ないのは、現在の需給関係から週2回の取引では間に合わなくなっていることのほか、極度に新鮮度を要求される商品であるため、できる限り短時間に小売商の店頭へ届ける必要があること、取扱い方がむづかしく、損傷しやすいため積込、積降しの回数が少ない程商品価値が落ちないこと、などのように取扱いの面倒な商品であるため、組合による委

託販売に適しておらず、組合も花の販売体勢が確立していないなどのほか、生産者側からは、店頭へ配達することにより顧客とのつながりが深まり、小売商側からは直接店頭へ配達を受けられる便宜のほか、計画的な仕入が可能であることなどがあげられる。

観葉植物の場合はCEAGESPの利用度が比較的に高く、今後個々の花屋への直接販売を減少し（直接販売を行なうと時間を消やすことと売掛金が増加することを理由としている）、サンパウロ及びリオ市の中央市場だけにしぼりたいという意見も聞かれるが、切花の場合は現在のCEAGESPの取引量は頂点に達している感じで、直接販売の方に伸びていく傾向がみられる。

(2)の農家が直接小売商に卸す方法としては、市内の花屋やフェラ（定期露天市）に直接卸していく方法のほか、大口消費者としての機関（政府、公共機関、銀行等）が直接農場に大量発注を行なう場合とがある。これらの大量発注は市の緑化運動、公園の造成、社内の飾りつけなどの場合に行なわれるもので散発的なものではあるが、量がまとまるので重要な商談となる。政府、公共機関の発注の場合は一般に入札形式をとり、もっとも条件のいいものを選んで納入する。これらの場合CEAGESPは一切通過しない。その他サンパウロに次ぐ大消費市場であるリオ市の中央市場に出荷することも多く、リオ市場の場合もまたCEAGESPは通過しない。

(3)農場の庭先販売は、主に遠距離の市場に搬出する場合に用いられる方法である。これらの仲買人は一般に奥地よりサンパウロへの出荷の帰り荷として利用しているものが多く、南伯のポルト・アレグレ市、ミナス州ベロオリゾンテ市やブラジリア方面への輸送が多い。

以上のほか農場で直接消費者に直売する方法もある。主に観光客をねらったもので街路筋の農場が地の利を利用して直売しているものである。この場合切花は少なく主に観葉植物、サボテン等の鉢物が主である。たゞし全体的にみてごく少量である。

海外輸出については農場が直接行なう場合と、輸出商社を経由する場合の二つの形態がある。特別なケースとしてはオランブラが組合で輸出を続けている。

以上の流通経路のうち数字が統計されているものはCEAGESPを経由する場合と、海外輸出の場合のみであるが、全体の消費傾向を知る1つの指標となるので引用すると次の状況である。

b. CEAGESPでの取引状況

現在CEAGESPに出荷されている種類は生花が44種(うち15種が毎月定期入荷, 29種が不定期入荷), ドライ・フラワー2種, 観葉植物5種であるがこのうち取扱金額からみて経済的価値の高いものとしては次のものがあげられる。

表8 主要切花のCEAGESPの取扱高

単位 CR 1,000

種 類	1976年	1977年	1978年
パ ラ	163274	227826	342833
グ ラ ジ オ ラ ス	7.895.1	66388	19.182.1
ボ ン ボ ン 菊	6,3947	11,0853	10.952.8
カーネーション	26140	3,6365	6,8022
日 本 菊	1.9034	3.9564	1.136.8
ミ ス ソ ー ラ	1.2202	1.9454	803.8
ブランキンニヤ	1,0580	1,5861	2,153.3
マルガリーダ	1,1032	1,2982	1,531.7
ラインニヤ, マルガリーダ	340.0	3558	2882
エストレリチヤ	4880	3159	7665

表9 観葉植物のCEAGESPにおける取扱高

単位 CR 1,000

サ マ ノ バ イ ア	164.5	651	1,2864
エウカリプト, シメリヤ	708	1109	650.9
ム ス ゴ	582	26.3	2003

以上の出所: CEAGESP-BOLETIM BNUAU

表 10 CEAGESPの取扱要

(入荷量)

種 類		1976年	1977年	1978年	
バ	ラ	1,000打	3,278.6	3,674.6	3,822.0
グ	ラ ジ オ ラ ス	"	928.1	1,295.0	891.2
ポ	ン ポ ン 菊	" 束	928.1	1,295.0	891.2
カ	ー ネ ー シ ョ ン	" 打	352.8	368.8	444.3
日	本 菊	"	68.5	107.3	21.6
ミ	ス ソ ー ラ	" 束	249.0	325.9	94.9
ブ	ラ ン キ ン ニ ヤ	" "	339.1	445.5	390.8
マ	ル ガ リ ー ダ	" "	256.0	217.8	189.1
ラ	インニヤ, マルガリーダ	" "	59.2	45.7	29.5
エ	ス ト レ リ チ ア	" 打	53.3	38.4	51.0
サ	マ ン バ イ ア	1,000束	153.7	37.4	296.4
エ	ウカリプト・シメリヤ	" "	54.9	63.0	47.2
ム	ス ゴ	" "	9.4	2.6	11.3

以上の出所: CEAGESP-BOLETIM ANUAL

上表にみられるとおり、過去3ヶ年間の統計をみると取扱高のもっとも高いものはバラで例年他を圧しており、経済上の価値は長年にわたって首位である。ブラジルにおける栽培の歴史も古く、栽培方法も比較的容易であるため、出荷量は例年多く栽培量のもっとも大きいことを示している。

バラにつぐものとしては、1975年までグラジオラスであったが、近年急速な発展をみている菊栽培の拡大によって、77年はボンボン菊がグラジオラスをしのいでおり、78年に再びグラジオラスが出荷量、金額ともにまさった。日本菊の方は本来鉢栽培を原則とするが、切花もカーネーションに匹敵する取扱高である。これら5種が現在のところサンパウロで市場性のある5大品種といえることができる。この他ミスソーラ、ブランキンニヤ、マルガリーダ、ラインニヤ・マルガリーダ、及びエストレリチヤが重要な品種としてあげられる。

最近一般消費市場にブームを呈している観葉植物では、サマンバイヤ、エウカリプト・シメリヤ、及びムスゴの出荷が多く、なかでもサマンバイヤの伸び方は急激で切花のラインニヤ・マルガリーダやエストレリチヤを抜きミスノーラ、マルガリーダの水準に達している。

c. 主要切花の動向

上にかゝげた切花の主要5品種について、CEAGESPへの最近の入荷状況と価格の推移は次の状況となっている。

イ) バラ

表11 バラのCEAGESPへの出荷量と価格の推移

年 度	入 荷 量 1,000 ^{ダース}	平 均 価 格 CR	前 年 比 価 格 上 昇 率
1971	2,3031	165	%
1972	3,1690	165	0
1973	3,8802	191	15.8
1974	3,0591	258	35.1
1975	3,4102	322	24.8
1976	3,2786	498	54.7
1977	3,6746	6.20	24.5
1978	3,8220	897	44.6

出所：CEAGESP-BOLETIM ANUAL

CEAGESPへの出荷量は可成り変動があり、1973年度の388万ダースを頂点としたあと74年には激減し、以後350万ダース前後の入荷が続いた後78年によりやく73年の線に戻っている。平均価格も安定性に欠けており出荷が低迷した74年、76年に上昇、77年はインフレ率以下の価格に止まったが、78年は入荷が増加した割に価格は上昇している。しかし全般的に供給過剰気味である。年間の平均価格は上表の通りであるが、年間の価格は毎月の出荷量によって大きな差異があり、一般に夏花は露地で容易にできるため生産が増加し、

花持ちも悪く価格は低調である。価格が上るのは夏花が終って生産量が減少する反面「母の日」の需要を迎える5月から「先生の日」がある8月までで毎年共通した傾向がみられる。

表 12 バラの月別入荷量(CEAGESP)

単位 1,000 ダース

月	1975年	1976年	1977年	1978年
1	3067	3482	2913	3042
2	3036	2126	2479	2136
3	3090	2194	2711	2672
4	2846	2660	3504	1965
5	3274	2658	3707	3136
6	2377	1168	2640	2582
7	1252	2361	2153	1868
8	1436	1250	2571	2612
9	3573	2577	2898	3937
10	3135	3702	4336	5317
11	2967	3751	2986	3799
12	4049	4847	3848	5154
計	34102	32786	36746	38220

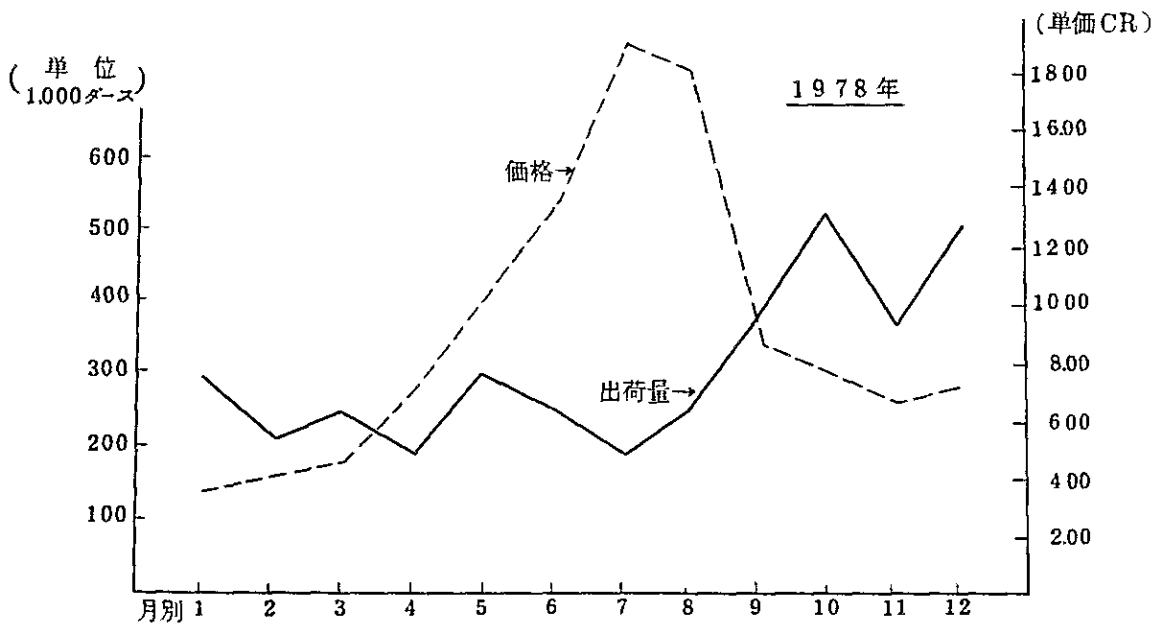
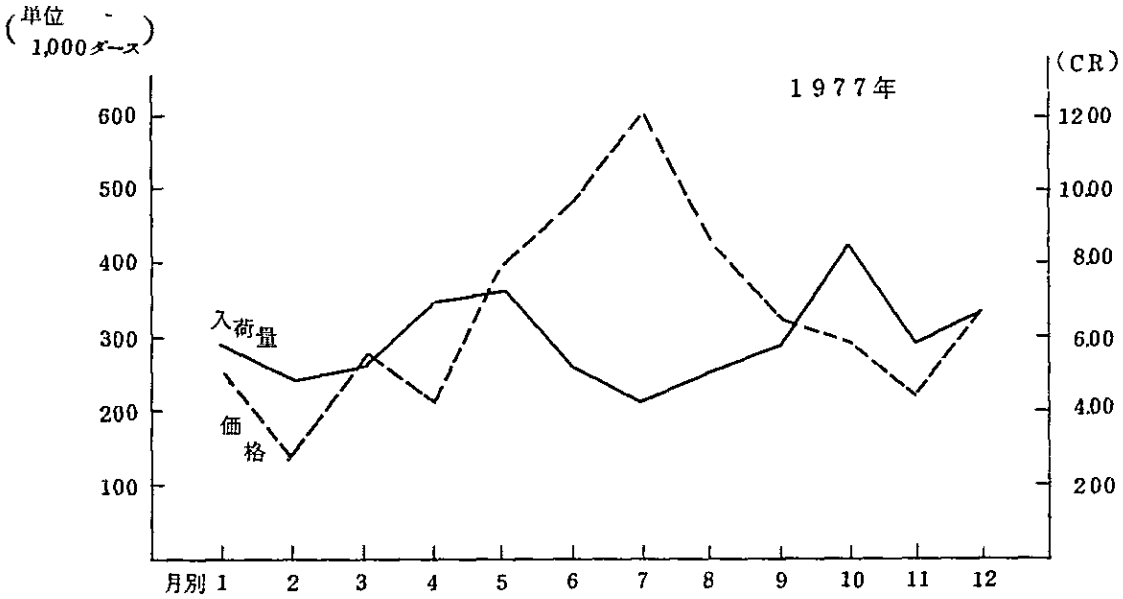
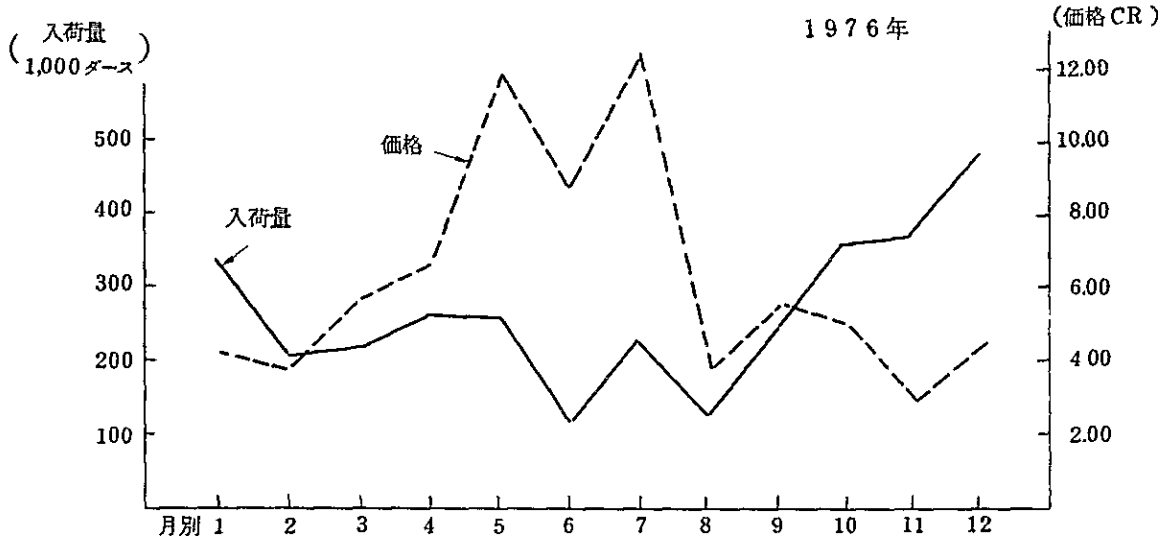
表 13 バラの月別価格(CEAGESP)

単位 1打当りクルゼイロ

月	1975年	1976年	1977年	1978年
1	116	233	309	374
2	106	196	280	436
3	181	230	347	452
4	206	364	422	703
5	510	673	809	1083
6	595	1207	967	1607
7	830	891	1222	1895
8	910	1243	864	1798
9	217	402	645	868
10	410	544	578	758
11	173	310	457	666
12	289	452	680	747
平均	322	498	620	897

出所：CEAGESP-BOLETIM ANUAL

表 14 バラの出荷量と価格の関係



ロ) グラジオラス

オランダ人入植地オランブラを主体とするグラジオラスのCEAGESP入荷量は、77年に出荷数量、取扱金額とも菊に抜かれたが78年度にはふたたびバラに次ぐ位置を占めており、その経済的重要性は依然として続いている。

表15 グラジオラスのCEAGESP入荷量と平均価格の推移

年 度	入 荷 量 1,000打	平 均 価 格 CR	前年比価格上昇率%
1971	3,790.0	※	
1972	※	※	
1973	1,484.9	277	—
1974	1,440.4	352	27.1
1975	1,547.7	494	40.3
1976	1,064.0	742	50.2
1977	670.6	990	33.4
1978	1,431.5	1340	35.4

出所：CEAGESP-BOLETIM ANUAL

※ 71年の平均価格及び73年の統計は入手できなかったため空白とする。

CEAGESPへの出荷量は76年、77年を除いて年間約150万ダースの出荷が続いている。平均価格は75年、76年と上昇した他は77年の入荷減少にもかかわらず前年比33.4%、78年の35.4%とインフレ率以下の値上りで実質的な上昇はみられていない。月別の入荷量と価格の関係は6、7月が入荷量の大小にかかわらず高く、またクリスマスのある12月に上昇する。

表 16 グラジオラスの月別入荷量

単位 1,000ダース

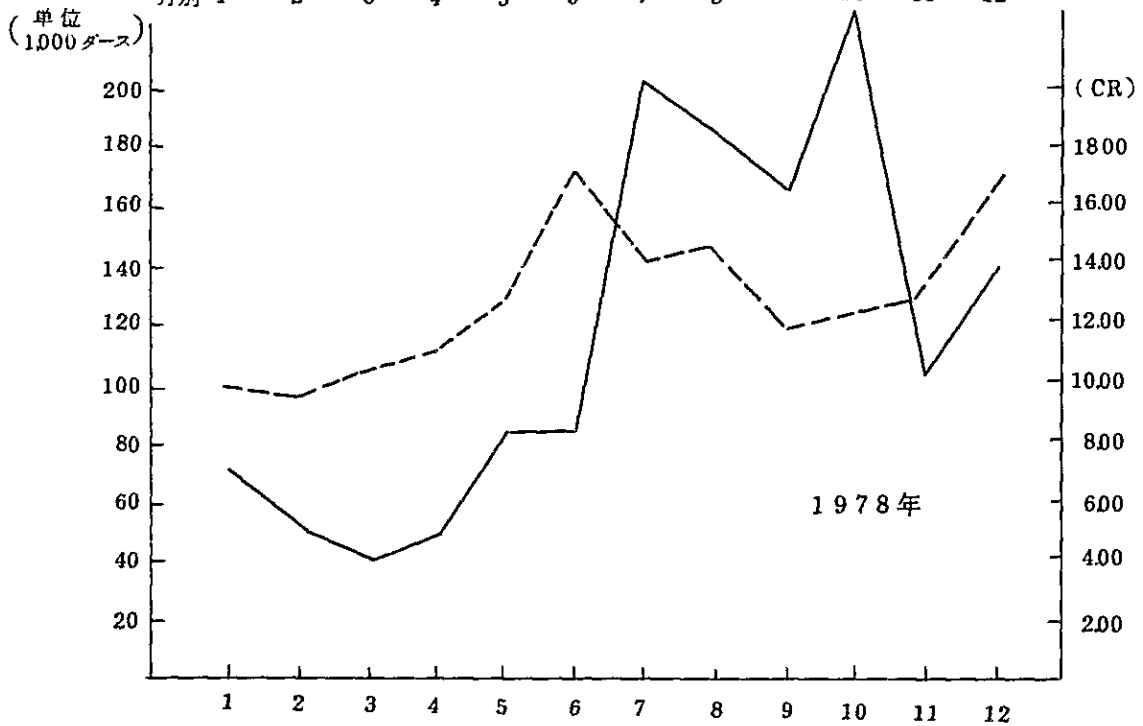
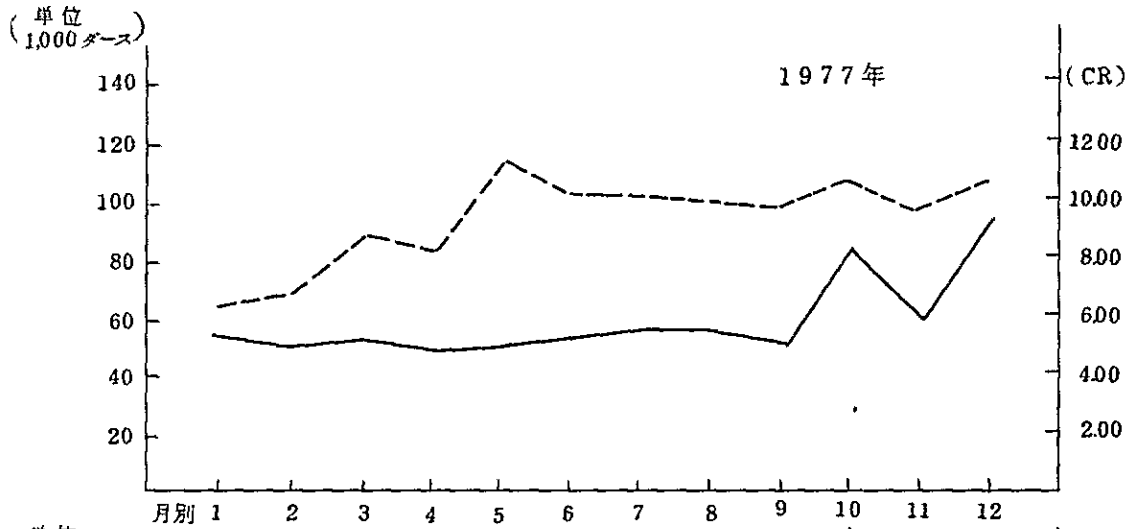
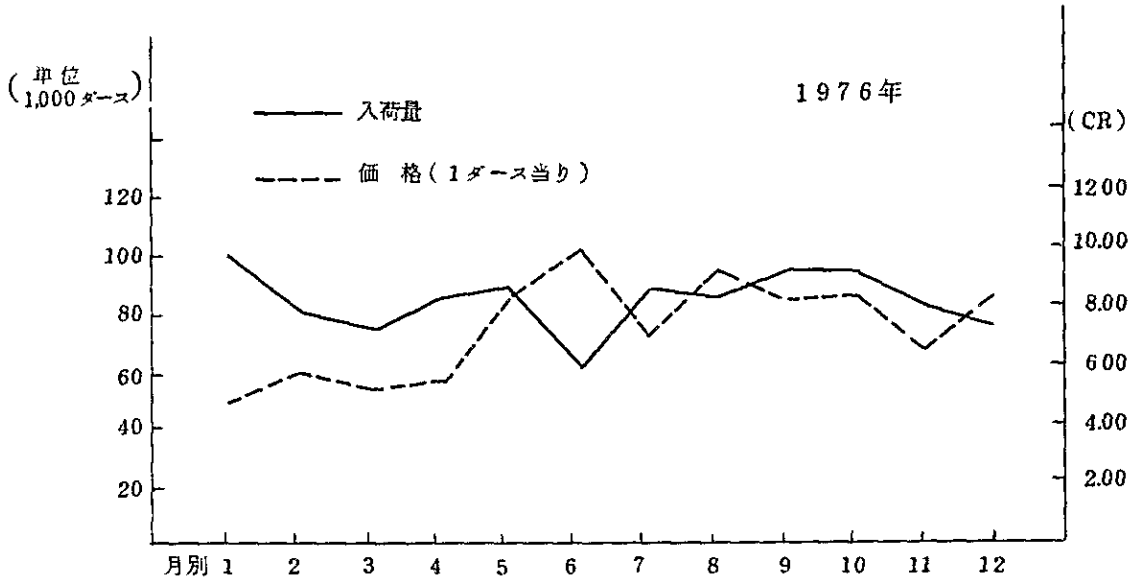
月	1975	1976	1977	1978
1	1481	1005	297	73.0
2	1210	812	27.5	50.8
3	104.1	732	29.7	40.5
4	906	871	51.4	46.0
5	1575	904	51.6	83.7
6	100.0	605	53.5	108.4
7	108.9	88.9	56.9	203.4
8	1407	112.3	56.9	186.4
9	127.4	118.8	50.9	165.1
10	1870	94.1	108.5	230.1
11	126.5	80.9	59.9	103.4
12	135.9	76.1	94.1	140.7
計	1,547.7	1,064.0	670.6	1,431.5

表 17 グラジオラスの月別価格

1	248	490	629	927
2	294	596	678	961
3	438	535	882	1064
4	365	563	830	1127
5	485	853	1149	1279
6	533	1020	1043	1705
7	757	710	1023	1421
8	783	932	1013	1468
9	426	842	981	1185
10	489	849	1075	1236
11	428	664	974	1290
12	672	835	1054	1686
平均	494	742	990	1339

出所：CEAGESP-BOLETIM ANUAL

表18 グラジオラスの入荷量と価格



ハ) 菊

表 19 菊の CEAGESP 入荷量と平均価格の推移

ポ ン ポ ン 菊

年 度	出 荷 量 1,000束	平 均 価 格 CR	前 年 比 価 格 上 昇 率 %
1972	6034	200	
1973	6538	225	125
1974	8292	304	351
1975	1,0283	464	526
1976	9281	689	485
1977	1,2950	856	24.2
1978	8912	1229	436

日 本 菊 (1,000ダース)

1972	309	4.62	
1973	785	631	36.5
1974	57.6	1363	116.0
1975	901	1870	37.2
1976	685	27.77	485
1977	1073	3688	32.8
1978	21.6	5263	42.7

出所：CEAGESP

菊類の CEAGESP 入荷量は、ポントン菊では72年以降増加しており、77年には入荷量、取引高共に従来2位の地位にあったグラジオラスをしのいでバラに次ぐ状態で、需要が急激に伸びている商品の1つである。価格はバラのような変動は少なく、年間を通じて比較的平均しており上下の差が少ない。

高麗の栽培技術を要する日本菊の方も、切花での出荷数量は少ないが、77年まで順調な伸びを示してきたものの、78年には病害の原因もあって急激に減少した。取引単価は全商品の中でもっとも高く、平均価格もほぼインフレ率に応じた上昇ぶりであった。

表 20 ポンポン菊の月別入荷量

単位 1,000 束

月	1975	1976	1977	1978
1	59.9	82.4	92.1	46.7
2	57.4	51.1	76.8	39.6
3	66.5	72.9	97.9	51.5
4	131.5	61.9	147.9	66.9
5	139.6	56.7	150.9	134.4
6	114.8	122.5	137.4	86.4
7	83.3	61.3	130.4	47.1
8	42.7	57.2	81.8	43.7
9	23.2	44.5	103.0	81.2
10	105.8	90.0	120.9	109.0
11	111.6	98.1	99.2	84.3
12	92.0	129.5	56.7	100.9
計	1,028.3	928.1	1,295.0	891.7

表 21 ポンポン菊の平均価格

1束当 CR

1	6.78	5.11	6.84	8.64
2	4.28	5.17	7.69	8.70
3	3.46	3.42	7.92	9.41
4	3.44	5.09	7.83	8.00
5	3.76	7.18	8.32	11.40
6	4.95	7.84	8.03	11.43
7	5.79	7.16	8.89	14.50
8	8.15	9.60	8.46	18.77
9	6.36	10.79	8.78	16.08
10	6.56	8.58	9.72	17.41
11	3.05	6.55	9.90	10.50
12	3.66	6.90	11.64	11.27
平均	4.64	6.89	8.56	12.35

出所：CEAGESP

表 2 2 ポンポン菊の入荷量と価格

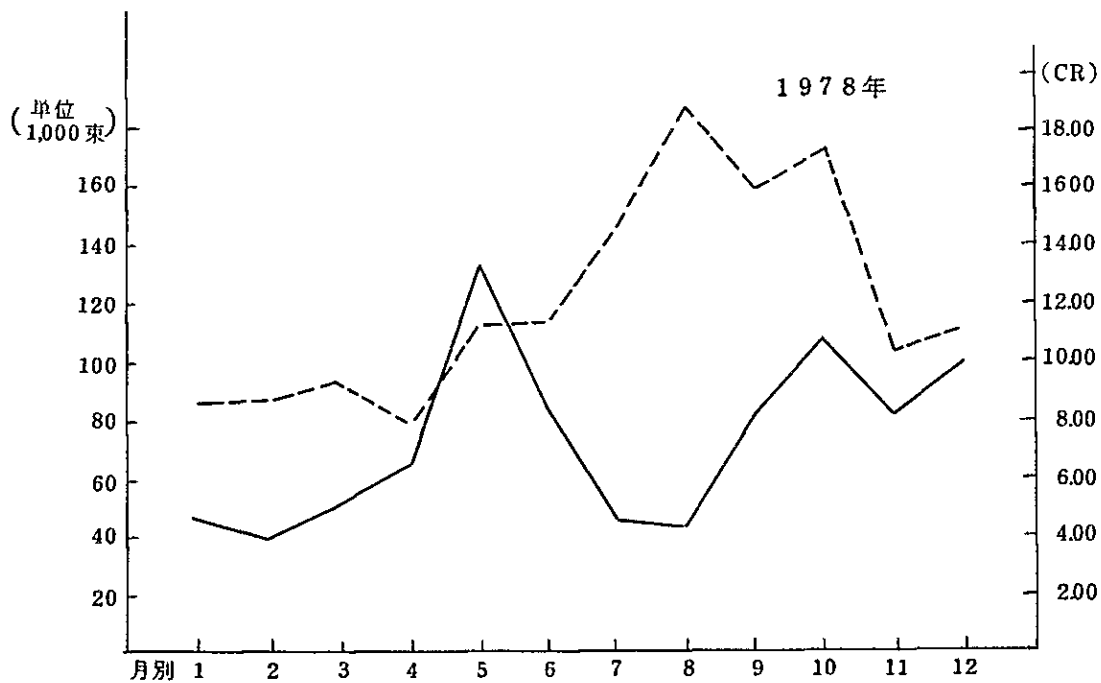
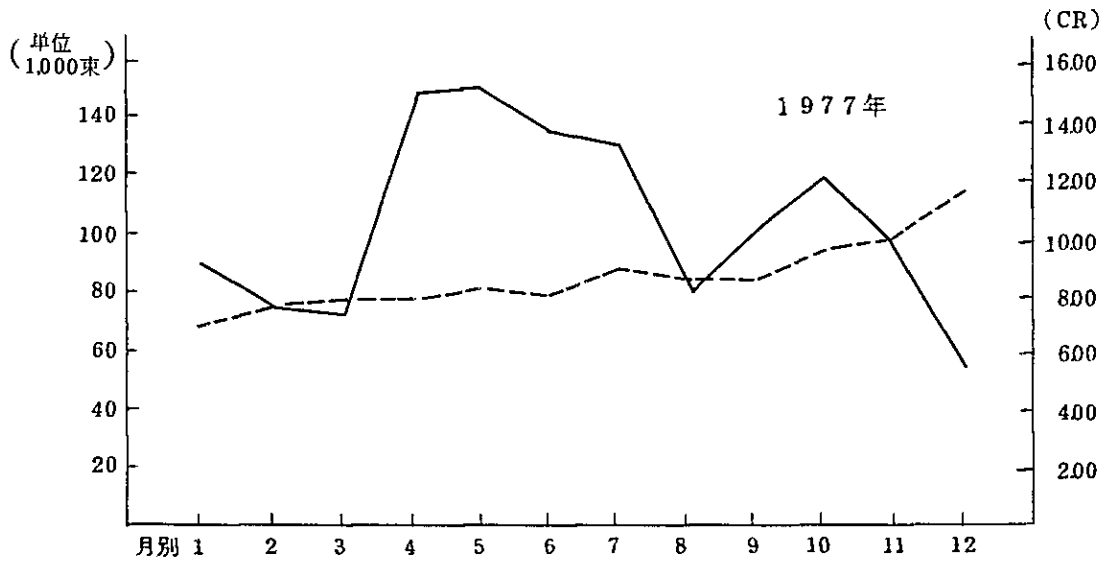
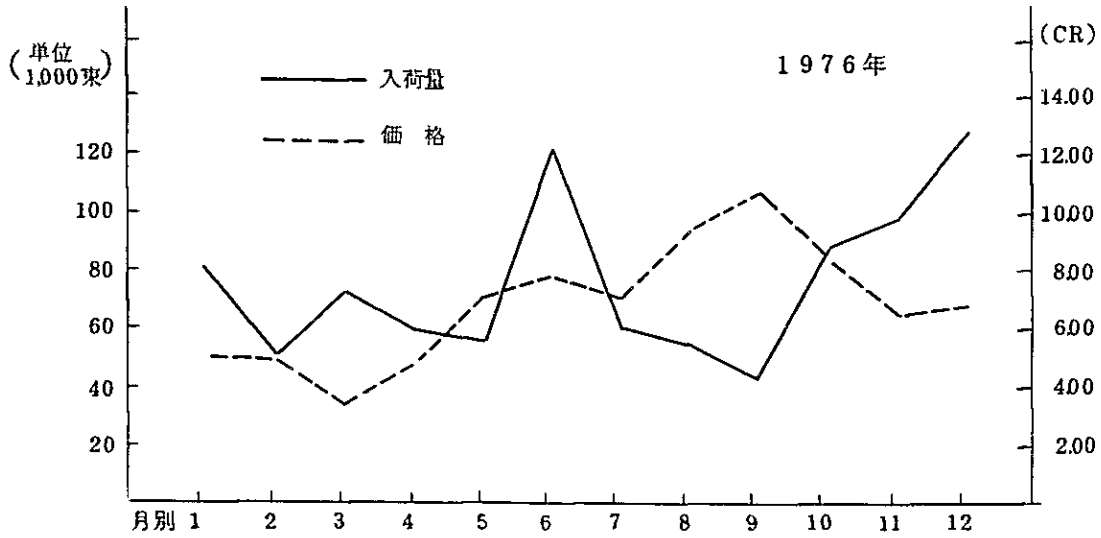


表 23 日本菊の月別入荷量

単位 1,000 束

月	1975	1976	1977	1978
1	15	5.9	5.0	20
2	18	3.1	6.6	1.1
3	16	4.9	12.0	10
4	17.1	4.1	13.8	1.5
5	15.6	3.6	9.5	6.5
6	8.8	4.0	10.0	3.8
7	5.8	0.8	6.6	1.1
8	4.5	4.2	6.7	0.5
9	4.0	5.3	11.4	2.3
10	11.8	10.2	14.6	1.0
11	12.5	12.1	8.5	0.7
12	5.1	10.3	2.5	0.1
計	90.1	68.5	107.3	21.6

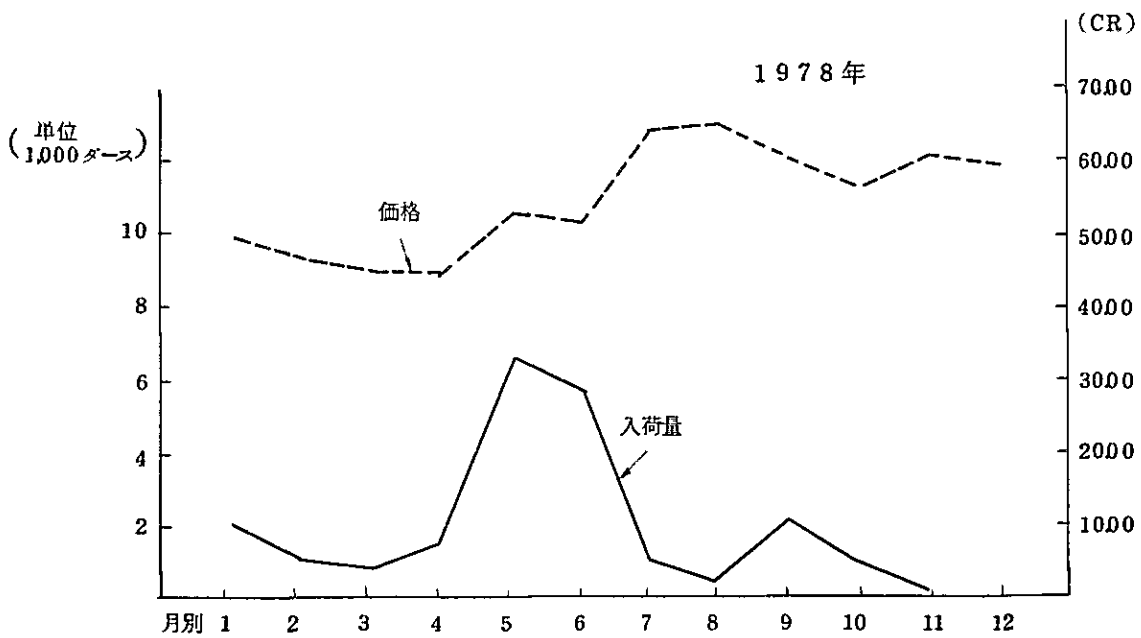
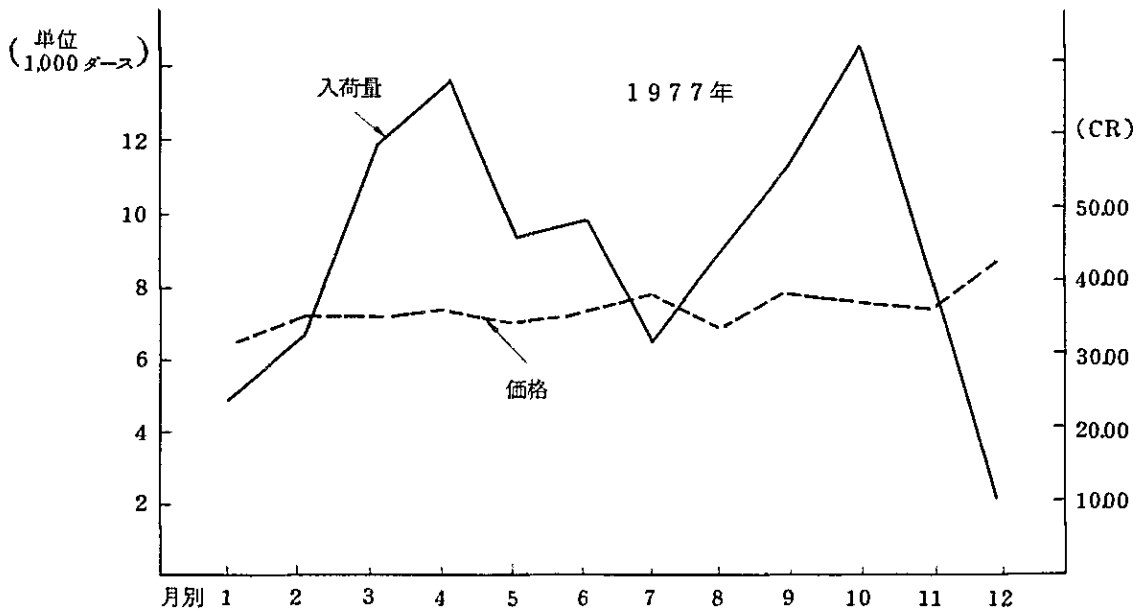
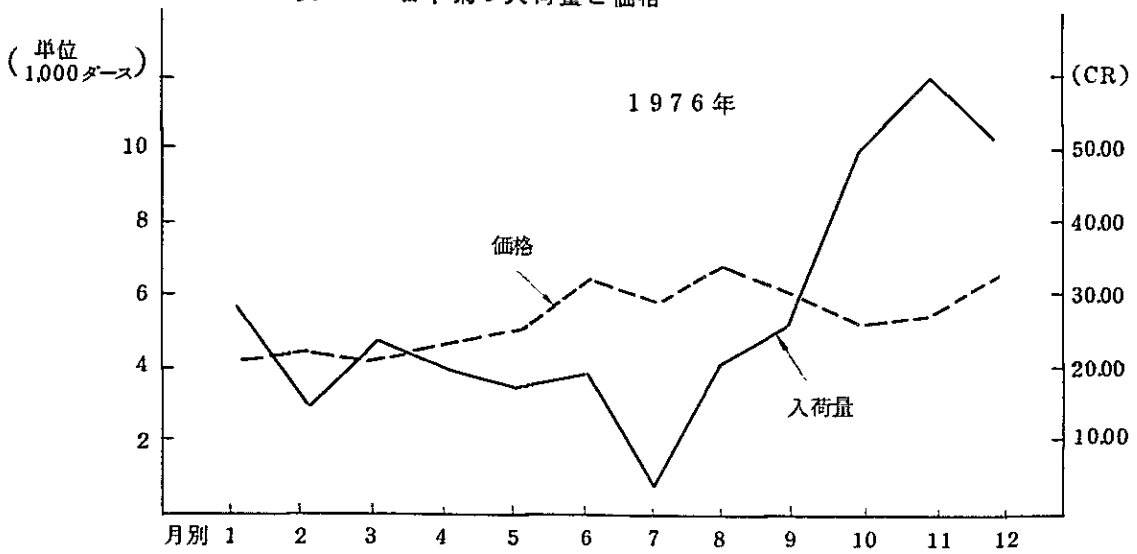
表 24 日本菊の月別価格

1束当 CR

1	1400	2117	3252	4945
2	16.15	2235	3538	4661
3	17.18	2166	3545	4403
4	18.45	2337	3629	4441
5	20.41	2681	3556	5241
6	16.71	3250	3693	5144
7	20.94	2908	3903	6483
8	24.02	3456	3432	6500
9	20.36	3060	3987	6084
10	20.07	2664	3800	5662
11	14.42	2778	3754	6125
12	19.12	3310	4324	5921
平均	18.70	27.70	36.88	5303

出所：CEAGESP

表 24 日本菊の入荷量と価格



二) カーネーション

表 25 カーネーションのCEAGESP入荷量と平均価格の推移

年 度	入 荷 量 1,000 打	平 均 価 格 CR	前 年 比 価 格 上 昇 率
1971	873.0	1.68	%
1972	850.9	1.99	18.5
1973	590.8	2.81	41.2
1974	520.2	3.54	30.0
1975	382.2	5.46	54.2
1976	352.8	7.41	35.7
1977	368.8	9.86	33.1
1978	444.3	15.31	55.3

出所：CEAGESP-BOLETIM ANUAL

カーネーションの入荷量は年々減少しており、75年～77年は71年当時の半数に満たない状態で、78年になってようやく半数に達した状態である。コチア産組の野口技師によると、この現象は近年病害のために生産量が減少したためであるとしている。入荷量の減少から価格は辛ろうじて持ちこたえている状況であるが、78年には出荷量がやゝ復活した割に平均価格は前年比55.3%と好調であった。

表 26 カーネーションの月別入荷量 単位 1,000ダース

月	1975	1976	1977	1978
1	40.1	260.0	33.3	18.2
2	28.1	14.4	25.4	16.1
3	25.9	15.4	20.7	17.0
4	16.3	29.3	16.2	17.7
5	22.1	15.8	24.1	32.4
6	17.1	28.2	14.9	34.1
7	35.7	22.8	33.6	30.7
8	53.9	41.8	52.9	37.7
9	50.3	34.2	45.2	63.7
10	40.6	43.2	37.8	65.8
11	20.2	39.4	34.9	58.3
12	31.9	47.7	29.8	52.6
計	382.2	352.8	368.8	444.3

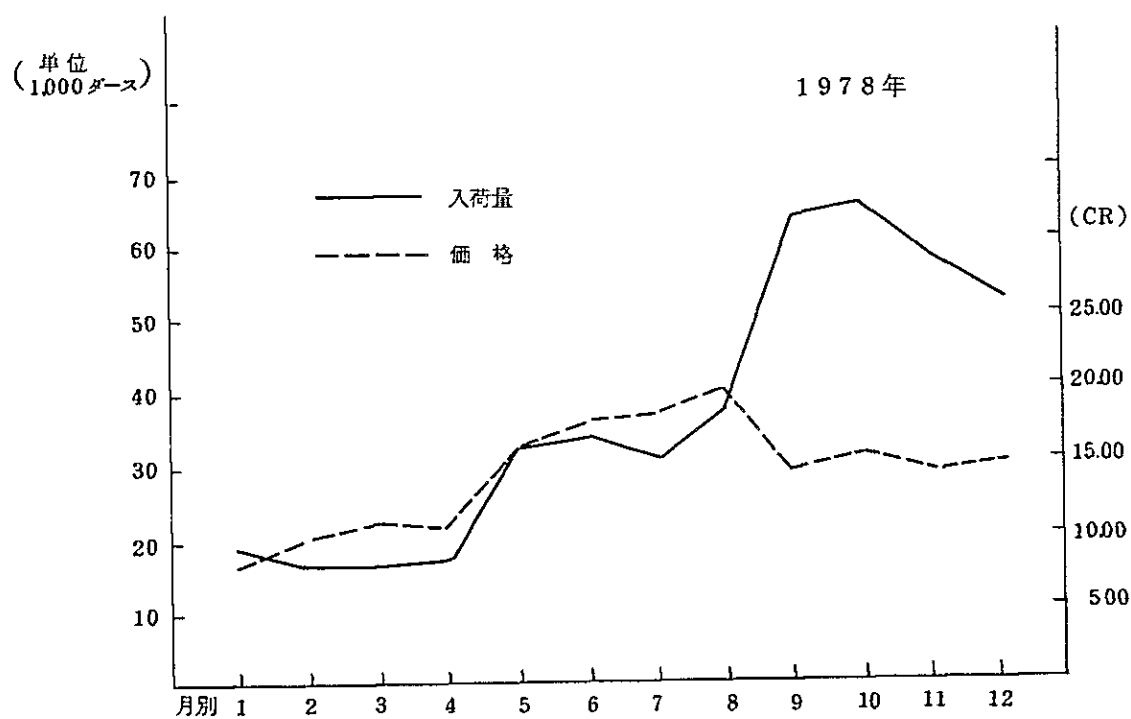
出所：CEAGESP

表 27 カーネーションの月別価格

月	1975	1976	1977	1978
1	386	442	674	816
2	3.12	455	6.15	1007
3	342	400	655	1113
4	4.07	521	9.69	1079
5	618	643	1006	1606
6	7.03	887	9.33	1812
7	842	7.29	1234	1883
8	790	1064	1040	2020
9	413	977	10.94	1449
10	600	757	11.14	1591
11	5.20	746	1075	1487
12	464	692	1100	1501
平均	5.46	7.41	986	1529

出所：CEAGESP

表 28 カーネーションの入荷量と価格



3. 輸 出

花の生産がすでに飽和状態に近づいてきたといわれ始めた70年代の始めより、国内市場に代る海外市場への関心が高まり、日系、オランダ系を中心とした企業的栽培農家の海外市場の視察が頻繁となり、輸出も除々に進められてきた。

バラを中心とする切花の輸出は、バラが77年までヨーロッパ及び北米市場7ヶ国、78年度で10ヶ国に輸出され、またバラ以外の切花は例年9～10ヶ国に向けて行なわれているが、バラ以外の花が78年度に増加した以外は、輸出量、金額とも大きな変化はなく横ばいの状態が続いている。

全体的にみて、花類の輸出の中で大きな割合を占めているのはドライフラワーで毎年着実に伸びており、花全体の輸出を支える形となっている。又、観葉植物の輸出がバラの輸出額を超えて伸びていることも注目される。

表 29 ブラジルの花の輸出実績

重 量 単位 トン

関税番号	品 名	1975年	1976年	1977年	1978年
06,03,01,01	ドライフラワー(A)	5643	5791	7399	885.9
" " 01,02	ドライフラワー(B)	1059	106.1	1248	1216
" " 02,01	バ ラ	2532	212.1	3896	208.9
" " 02,99	その他の花	289.8	386.7	3800	675.4
06,04,00,00	観葉植物	2691	2933	4432	309.4
	計	1,491.3	1,577.3	2,077.5	2,201.2

注 ドライフラワー(A)はバラ積み、(B)は鉢や籠に飾りつけたもの

金 額 単位 US\$ 1,000

06,03,01,01	ドライフラワー(A)	1,664.4	1,701.3	2,392.9	2,893.4
" " 01,02	ドライフラワー(B)	653.6	589.6	750.5	764.3
" " 02,01	バ ラ	589.7	389.5	246.0	386.1
" " 02,99	その他の花	267.2	381.3	486.1	705.5
06,04,00,00	観葉植物	319.2	493.0	891.4	711.9
	計	3,374.1	3,554.7	4,766.9	5,461.2

以上の出所：CACEX

表 30 輸 出 平 均 単 価

単位 US\$/Kg

関税番号	品 名	1975年	1976年	1977年	1978年
06,03,01,01	ドライフラワー(A)	291	294	3.23	3.27
" " 01,02	ドライフラワー(B)	617	556	6.01	6.29
" " 02,01	パ ラ	233	184	1.29	1.85
" " 02,99	そ の 他 の 花	089	098	1.28	1.05
06,04,00,00	観 葉 植 物	119	168	2.01	2.30

出所: CACEX

イ) ドライフラワー

フロール・デ・トリーゴ, センブレ・ビーバ等を中心とするドライフラワーは、切花と異り船による輸出が可能であるため、量、金額とも切花を大きくしのいでおり輸出も順調に伸びている商品である。輸出方法はバラのまま、梱包して送りつけ、輸入国側で鉢や籠に飾りつける方法と、すでに飾りつけた形で輸出する方法があるが、後者の場合は容量がかさみ運賃コストが高くなるためバラ積みする方法による場合が多い。

輸出先国は北米を筆頭としヨーロッパ諸国、南米諸国のほか日本も重要な輸出先国の1つに数えられる。輸出港別の統計からみるとサントス及びリオ・デ・ジャネイロより出荷される量をもっとも多くサン・パウロ、リオ両州よりの出荷物の他ミナス州よりの出荷物もこの両港を利用して輸出される。飛行機による輸出は催少である。輸出価格はゆるやかに上昇しており今後も輸出の増加が期待される商品である。

表 31 バラ積みドライフラワーの輸出実績(金額)

単位 US\$1,000

輸 出 先 国	1975	1976	1977	※ 1978
北 米	918.9	897.7	1,604.9	1,730.1
日 本	128.8	208.1	149.6	84.0
イ タ リ ー	230.1	133.0	166.0	141.2
カ ナ ダ	—	71.3	111.9	74.3
ス ペ イ ン	39.7	70.3	107.6	76.7

西 独	438	661	100.1	153.5
オランダ	79.9	59.9	28.4	52.6
フランス	278	39.3	13.5	13.6
オーストラリア	285	281	33.4	15.3
ベネズエラ	17.0	200	27.1	13.3
その他の国	129.9	117.5	50.4	60.6
1978年度未分類	—	—	—	478.2
合 計	1,644.4	1,701.3	2,392.9	2,893.4

出所：CACEX

注) 1978年度は1月～10分, 11, 12月分はいま分類されていないので「1978年度未分類」の項にまとめた。

輸 出 先 国 数

輸 出 先 国 数	17ヶ国	20ヶ国	20ヶ国	20ヶ国
	輸 出 港			金額 US\$1,000
サントス	816.2	673.7	780.4	1,069.8
リオ・デ・ジャネイロ	468.0	561.1	782.9	888.4
パラナグワ	167.9	176.9	334.7	225.7
空 輸	53.9	—	200.9	74.0
その他の港	158.4	289.6	294.0	635.5
計	1,664.4	1,701.3	2,392.9	2,893.4

出所：CACEX

表 32 飾つけ済ドライフラワーの輸出実績（金額）

単位 US\$1,000

輸 出 先 国	1975	1976	1977	1978
北 米	454.5	273.9	418.6	447.9
日 本	125.0	224.3	244.2	145.5
ス ペ イ ン	7.9	8.6	48.0	—
カ ナ ダ	10.5	13.1	14.7	1.9
プエルト・リコ	7.8	8.6	7.6	12.7
その他の国	47.9	61.1	17.4	10.5
1978年度未分類	—	—	—	145.8
計	653.6	589.6	750.5	764.3

出所：CACEX

輸出先国数	12ヶ国	15ヶ国	15ヶ国	10ヶ国
	輸 出 港			単位 US\$1,000
サントス	2163	289.7	4001	2871
リオ・デ・ジャネイロ	127.0	96.3	1221	40.4
パラナグア	159.9	70.9	1149	253.4
空 輸	31.3	—	—	0.2
そ の 他	119.1	132.7	113.4	183.2
計	653.6	589.6	750.5	764.3

出所：CACEX

ドライフラワーの主要輸出会社としては次のものがあげられる。（輸出金額は78年度1～10月の実績）

	US\$1,000
BRASITIMEX COMERCIO E INDUSTRIA LTDA	461.6
IRMÃOS SAKURAI LTDA	429.8
CARLOS SCHNEIDER S.A. COM. E IND	565.8
INTERFLORA IND. COM.LTDA	262.3
FLORES DECORATIVAS LTDA	288.6
ITAFLORES IMPORTAÇÕES E EXPORTAÇÕES LTDA	224.0
CORONA INTERNACIONAL LTDA	222.6
DRIEO FLOWER EXP. LTDA	263.9

バラ積みドライフラワーの輸出会社は1978年度で全国に20社、飾つけドライフラワーの場合は9社があり、うち2社は両方兼用である。

ロ) バ ラ

バラの輸出先国としては西独が圧倒的に大きく、75年、76年にはバラ輸出額の75%を占めていたが、77年以降イタリーへの輸出が増加してきたことや、北米への輸出が開始されたことなどによって、西独の比率は78年度で60%程度になっている。しかしながら全体的な傾向としては毎年下降気味で輸出市場の拡大はみられない。これはヨーロッパの輸入解禁時期に集まるアフリカ産バラとの競合と輸出価格が75年を頂点として以来、キロ当り（約4ダ

ース) 2ドル以下に停滞しているため意欲をそがれているものとみられる。

輸出方法は当然空輸でリオ市がガレオン空港、及びサンパウロ州カンピーナスのピラコッポス空港が利用されている。

表 33 バラの輸出実績(金額)

US\$1,000

輸 出 先 国	1975	1976	1977	1978 ※
西 独	451.4	289.0	161.5	116.8
オーストリア	77.8	43.8	23.5	19.8
イ タ リ ー	16.4	29.2	33.1	30.3
ス イ ス	28.2	15.2	8.5	3.9
英 国	12.2	10.8	10.6	6.5
ス エ ー デ ン	2.4	0.7	—	—
ス ペ イ ン	—	0.8	—	—
北 米	—	—	8.0	14.6
オ ラ ン ダ	—	—	0.8	0.7
カ ナ ダ	1.3	—	—	—
1978年度未分類	—	—	—	193.5
計	589.7	389.5	246.0	386.1

輸 出 先 国 数	7ヶ国	7ヶ国	7ヶ国	10ヶ国
-----------	-----	-----	-----	------

輸 出 港

リオ・デ・ジャネイロ(空輸)	540.9	5.5	237.1	192.3
サン・パウロ(空輸)	48.8	384.0	8.8	3.7

出所: CACEX ※ 1978年は1月~10月分だけ国別分類済

1978年度の輸出実績に発表された輸出会社は4社のみで、オランブラが大きな割合を占めているが、アチバイヤのフロランジャを始めとする日系の輸出実績はない。輸出実績金額は1978年1月~10月分である。 単位 US\$1,000

1978年の輸出会社別実績

COOPERATIVA AGRO-PECUARIA HOLAMBRA	196.1
UNIFLOR UNIÃO BARBACENENSE FLORICULTURA LTDA	192.3

SAN REPRESENTAÇÕES E IMPORTAÇÕES LTDA	2.9
WARVEN MEER BRSS LTDA	0.7

ハ) その他の花

ブラジルの輸出統計のうち花に関してはバラだけを区分し、その他の花は一括して統計されているため種類別の内容は不明であるが、品種としてはグラジオラス及び接木サボテンが大きな割合を占めている。

輸出先国はバラの場合と同様に西独がもっとも多く、イタリー、英国がこれに次いでおり、北米への輸出もバラと同様で、従来少量の輸出が78年より増加しているものの数量、金額とも極めて少量で輸出先国としての重要性を持つにいたっていない。

表 34 その他の花の輸出実績(金額)

単位 US\$1,000

輸 出 先 国	1975	1976	1977	1978
西 独	1129	1577	1706	1235
イ タ リ ー	78.5	1066	1897	1968
英 国	47.7	808	703	72.6
オ ラ ン ダ	35	3.8	20.8	47.5
フ ラ ン ス	—	89	43	14.3
北 米	—	07	0.7	14.7
そ の 他 の 国	246	21.5	29.7	18.8
1978年度未分類	—	—	—	217.3
計	267.2	380.0	486.1	705.5

輸 出 先 国 数	6ヶ国	9ヶ国	10ヶ国	13ヶ国

輸 出 港

	258.7	367.9	481.5	429.1
サンパウロ州内空港				
リオ州内 "	8.5	121	4.6	79.2

出所: CACEX

輸出会社としては次のものがあげられる。この中でオランブラが圧倒的に多く、グラジオラスを主体とするヨーロッパ向輸出を行っている。(金額は78年1月~10月統計)

	US\$1,000
COOPERATIVA AGROPECUARIA HOLAMBRA	379.8
LATINAMERICA MERCANTIL LTDA	45.7
WARVEN MERC BRAS LTDA	33.7
EXP.IMP.REPR.LTDA	17.2
他 4 社	

二) 観葉植物

サマンバイヤ、センブレ・ビーバを主体とする観葉植物の場合は、ドライフラワーに次いで長期間輸送が可能であるため、船を利用した輸出が盛んで、輸出量も年々増加を続けている分野である。現時点での輸出先国は12ヶ国で北米、イタリーよりの買付けが大きい。とくに北米への輸出は急カーブを描いて伸びており、75年頃の4万ドル程度の輸出額は77年に32万ドル、78年は10月まで28万ドルに達している。

価格面では、他の切花が低調なのに反して上昇率ももっとも高く、生産者が興味を持っている分野の1つである。

表 35 観葉植物の輸出実績(金額)

単位 US\$1,000 FOB

輸 出 先 国	1975	1976	1977	※1978
北 米	39.5	147.6	320.7	281.6
イ タ リ ー	117.3	160.6	247.7	121.5
西 独	40.5	54.8	101.0	49.8
オ ラ ン ダ	28.2	32.4	81.0	45.9
カ ナ ダ	3.8	45.2	45.8	36.7
そ の 他 の 国	9.9	52.4	95.2	41.6
1978年未分類分※	—	—	—	134.8
計	319.2	493.0	891.4	711.9

輸 出 先 国 数	12ヶ国	12ヶ国	14ヶ国	12ヶ国
-----------	------	------	------	------

輸 出 港

サントス	1 2 1 2	2 6 0 9	5 6 9.9	3 2 4 9
リオ・デ・ジャネイロ	3 8.1	7 1.7	7 7.6	4 8
パラナ州港	3 6 9	8 3 1	1 8 2 1	1 7 6 0
その他海港	8 1 6	7 4 0	5 7.5	2 0 3 9
空 港	4 1 4	3.3	4.3	2 3

以上出所：CACEX

1978年1月～10月間に輸出を行った会社は14社で、うち4社が大手である。

	US\$1,000
BRASITIMEX COM.IND. LTDA	1 6 1 2
H. CARLOS SCHNEIDER S.A. COM IND	1 1 3.1
PROSPERA COMAL. LTDA	9 1 5
M.J. HEIPPER	6 2.3

4. 問題点と今後の見通し

サンパウロ近郊の花弁栽培はここ10年間に大きな発展をみた分野であるが、現在の花生産について一般にいられていることは、蔬菜作りよりは収益性に勝るが、全般的に生産過剰気味で価格の変動がはげしく、非常にきびしい業界であるということである。たしかにCEAGESPへの入荷量と価格の変動をみると、入荷量が増加するとたちまち価格は下落し、バラの場合など夏期の出荷は、現在1ダース打ちCR6といわれる生産コストを割る状態で、安定性に欠ける農業分野であることがわかる。もはや天候まかせの露路栽培ではやっていけない時代きている。生産が過剰となる懸念はすでに10年前より云われていたことで、この間長期にわたる競争のなかで脱落、転向したものは多く、現存する花弁栽培農家は本格的な花作りとして生き残った農家だけであるともいられている。

この激しい競争の中で堅実な営農を続けるためには、生産コストの軽減を図りながら国内市場では高値をねらった出荷体制と、市場が安値のときでも高く格付される高品質のものを作る技術、新品種の継続的導入による新しい需要の喚起等が必然的に要求され、また海外に対する輸出の増大によって、市場の多様化を図ることが必要視されている。

農業技術面は別として、ブラジルの花弁栽培の経営面で農業者が直面している困難な問題点は、生産から販売までのすべてを個人で処理しなければならない点である。これは新鮮度を要求する商品であること、損傷しやすい商品であるため組合の委託販売制度を利用することができず、生産者団体もないため農場での庭先販売をする場合は別として、CEAGESPに出荷する場合でも運搬し、買手と交渉し、販売代金の回収まですべてを行なわねばならない。このため花屋やフェイラに卸す場合はさらに大きな時間的、経済的ロスが生じている。当然、規模が拡大されてくると個人経営方式では手が行き届かなくなってきており、生産と販売を分離した企業的经营組織が要求されてきている。

日系農家の中にも企業経営は次第に出現しており好結果を得ているが、1977年に来伯した小西岡山大学教授も企現的経営の必然性を指摘しており、花作りの先進国アルゼンチンは古い経営方式から抜けきれずにいるが、ブラジルは世界の花卉園芸が企業化しつつある時代に開始されたので、企業化への脱皮が容易な環境にあると述べたが、すでに企業化している日系花弁栽培農家は、他に一步抜きんできた発展がみられている。

しかしながら、各栽培農家の形態が企業化したとしても、1企業、1農場の出荷には限度が

あり、販売面を更に効率化、合理化するためには、生産者間の組織が必要となる。花卉栽培者の間には、古くより親睦団体としてのAPAFLOR(ASSOCIAÇÃO PAULISTA DE FLORICULTORES パウリスタ花卉栽培者協会)があるが、経済活動は行っていない。経済団体が出来ない1つの理由として、各栽培農家の力が強くなりすぎてまとまらないとの説もある。

この生産者団体不足の現実には、国内市場に起る問題だけでなく、海外輸出の問題に関連する。輸出面についてみると、ブラジルの花にとって重要な海外市場であるヨーロッパ及び北米は、丁度南北半球の対症的な位置にあるため、ブラジルでは夏期の出荷が、北半球では冬の端境期に入るという有利な立地条件下にある。最大の市場であるヨーロッパでは、温室栽培が始まる3月下旬から10月中旬まで、各国の生産者保護のため外国からの花の輸入は禁止され、10月下旬から3月上旬までの半年間、これが解禁されるという。この期間がブラジル花の輸出時期にあたり、しかもブラジルでは出荷の最盛期というわけで、理論上は輸出は極めて有利な条件下に置かれていることになる。にもかかわらず輸出統計によると、切花関係では78年にグラジオラスを含む"その他の花"が増加した他は、横ばい状態が続いており、切花以外にドライフラワーの輸出増加で全体の輸出量を維持している状態が続いている。

切花の輸出が伸びない原因の1つとして、ブラジルと同じ地理的条件下にあるエノブトやアフリカ諸国、とくにオランダが計画栽培を行っているケニヤ、その他イスラエルや南米では世界最高の品質といわれるコロンビア等から送られる花との競合問題があり、これらの花と比較してブラジルの花は劣っていると古くから言われてきた。技術上の問題はその後の改良によって可成り向上してきたわけであるが、次の問題点として輸出に見合う同品質のものが一定量まとまらないという大きな問題が、依然として解決されていない。例えばバラの輸出の場合、飛行機輸送を運賃割引きを受けて効率的に行なおうとすれば、1回の発送が最低100キロ(バラ約400ダース)が一応の基準となる。これを週3~4回発送を続けていくとすると、も早個人の農場では間に合わない数量である。一方輸出入契約は輸入コストを落とすため大量になるのが普通である。この大量契約に応じ得る数量と品質を統一する問題が発生する。花卉栽培者が組合などの団体を作り、各組合が計画的に栽培、出荷して始めて可能となるものである。日本の場合、組合事務所の机上電話一本で各農家よりの出荷量をまとめ数千ダースがたちどころに集まるといわれているが、このような組織がサンパウロ近郊の花卉栽培者になくことが最大の問題点であると、ブラジル花卉界の重鎮である石橋初雄氏は指摘している。

この問題を解決している唯一の団体は、オランダ人移住地のオランブラである。彼らは本国のオランダがヨーロッパの花処であり、すぐれた組合組織の環境の中から移住してきているので古くより組合事業として取扱っており、移住地内の生産物だけでなく、他の農家から花を買いとる仲買業も行っており、販売組織はフェラ（露天店）の店頭まで配達するといったサービス振りであり、輸出面にも大きな力を発揮している。日系栽培者は、戦前より技術改良や新品種の導入に貢献した先駆者、戦後のコチア青年移民を中心とする近代的経営等、個々には極めて大きな功績を残しているが、組織面ではオランブラに学ぶところが大きい。

花への需要は国民の生活環境とくに経済環境によって大きく変る商品である。石橋氏によると氏が日本に帰国した際、12年間に3回の訪日の間に高度成長の影響を受けて、花の生産は10倍に増加していたのに驚いた（訪問先の故郷で）とのことであった。これに比較するとブラジルはいまだ市場は非常に狭少であり、国民所得の向上によって現在の購買力のない階層が向上してくれば需要は大きく飛躍するとみており、又いかなる状況下であっても良品を作るものには市場は不足ないという意見で、今後の花卉産業の発展を確信している。またコチア地方で電照ギクの企業栽培を行っている山田氏によると、花の場合も他の農産物と同じように、良質のものを長期に出荷し続ければ、顧客も増え販売の安定が得られるとの論である。

また営農面ではコストの上昇とくに人件費の高騰があげられ、近郊土地の入手も次第に困難となっている。従来消費市場への距離という問題が重視され、近郊に集った花栽培も、オランダが人件費の安いケニアで、北米がコロンビアで栽培を始めているように、国内でも道路事情の好転に伴って、次第に奥地化していくものと思われる。

海外の動向としては、最大の市場であるヨーロッパの生産国オランダなど、人件費のかさむ切花は生産が落ち、鉢物の生産に力を入れて、切花は輸入する方向ではないかとの情報もある。（ブラジルの農業1977年1月号）、今後海外市場も従来と異った需要が期待される。

（1979.3月）

JICA